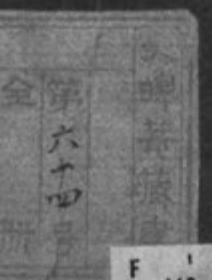


X

S156



F
シ-118

5冊

490.9

Sh-56

No.3749

18 S 156



富士川文庫

2023

序

曾太天草者何書名也曷為書而能
養育小兒之害也著者誰著者
我牛山先生也先生自弱少
潛心仁術而造其國奧嘗嘗事于
中津侯者年矣今也解綬來寓于

京為人治レ而レ久振アラタナハシ輦下アラタナハシ莫所編錄
書凡若干。咸有功於斬民大矣。嚮立豐州。著婦人古登布幾革。行平世。又且欲編老人也。之奈比革是隨其信而スカニ治アラタナハシ也。古昔扁鵲過邯鄲。聞貴婦人アラタナハシ。下醫。

追濟陽。聞周人愛老人。而為耳目。裨醫。未入咸陽。聞秦人愛小兒。而為小兒醫。一日先生貧。若人之流惡。步歟。竇小戊子。京師火。其藏版。曾太天草。亦燒亡焉。頃。書肆。槩。氏。清利。蓋古重使慈幼。

備六養中之一則此書不可一日無也。既而先生。ゆき増補。加古栗方。壽諸梓。事以垂不朽云。

正德甲午春三月。越中富山醫生杏三折謹識。



小兒養育草序

いや聖人。民小六の養と教へ。詔不慈幼。之を不曉へ。不定。之。世人。之。人。之。内。中華の書。中。乳母。之。ぬ。之。表帛。衣服。之。教。之。互。之。愚。ば。之。ハ。之。と。も。か。の。き。す。ぐ。一。わ。之。愛。著。少。之。姑。息。之。兒。之。病。之。生。せ。之。漸。長。り。て。懦。弱。少。之。氣。德。之。破。れ。仰。ひ。て。父。母。小。之。す。れ。之。あ。之。之。俯。之。

妻子成養ヤシナフとて人間不慈不孝ハシナフ不孝ハシナフ憐カミナフま
さんや予ハシナフ家弟貞庵啓益タケルヒサクハ幼ハシナフあ鑑カミナフと學ハシナフ
ああわ御ハシナフ卷ハシナフ城京師キョウジ小負ハシナフい友ハシナフ東武トウブ
をとくえ終ハシナフ小彦ハシナフ道ハシナフ功ハシナフ中ハシナフ爲ハシナフ
中津侯ハシナフ小笠原君ハシナフ小使ハシナフて侍醫ハシナフ市ハシナフ中ハシナフ行ハシナフ
い内ハシナフ辭ハシナフて平安城ハシナフ不ハシナフよ市ハシナフにハシナフ中ハシナフ行ハシナフ
はハシナフ牛山翁ハシナフとよ吐納ハシナフ世ハシナフ人ハシナフ慈幼ハシナフ
小兒ハシナフ養育ハシナフ草ハシナフなづか婦人ハシナフ愚夫ハシナフのまてハシナフ

ひくと勢ハシナフて故國ハシナフする家族ハシナフ小女ハシナフ僕ハシナフ
此書成よしに初生ハシナフわが養育ハシナフ痘疹ハシナフ乃ハシナフと
よび十歲ハシナフ高ハシナフ教誨ハシナフはまひうハシナフにあきらめ
ハキハシナフおもハシナフ古ハシナフ人ハシナフ小兒ハシナフ成芽兒ハシナフといひま
嫩菜ハシナフ嬌花ハシナフひハシナフ草木ハシナフ乃ハシナフ初ハシナフて萌出ハシナフ花ハシナフ初
うくうふうゆるにまともどきハシナフへそくしてひう
多ハシナフやうて名ハシナフ小ハシナフまつて啓益タケルヒサクに婦
人壽草ハシナフやソト書ハシナフけりて世ハシナフ小ハシナフこぼりれ
みれ小ハシナフぐにおの書ハシナフな人ハシナフであるをうへり

此家族の事にて御ふまよ幼人梓おやこ小うえ
もとく世よとすかせてすとく育草いくい
ありて裔ひこひいて孫瓜融まごとうじゆう乃は名後じま子
ばくん事終わざくはんれとんりんやとてえどと
はれきくかくれものはれきく一

元禄十六癸未歲仲秋日

筑前植木逸民香月五平子秀房書



中室必用養育草卷一

目錄

一 小兒教育の總論

誕生の說

嬰子生長の節時より用ひ葉刷の說

圓字取舉板の說

腕弓と断り說

產湯乃經せうせうち鄰よ活はるに經せう

七 亂付の疫 すきる亂母とめのくらひ廢くと
りの疫

八 すき子の亂と饑一しるの疫
亂母と饑ふの疫

九 亂母の病すよりく父をやひとまよひの疫
せら 亂付弊は時角氣蒸利の疫

十 亂付弊は時角氣蒸利の疫
かみ 衣弊の疫

十一 衣弊の疫

小治必用養育草巻一

牛山翁

奇月啓益

謹

一 小治必用養育乃總論

○凡人乃親父子とも至る事や已理乃自然にてある
ことあくまち半ばにもありてよき事也天子皇后
すわ下、あや一才賤乃男賤乃女よしとあまびひのう
もよしとあまびひのうへは天子乃正き氣とてけて天と戴き
てと歸く天地人乃三才と稱せよとあれ地乃靈乃長
れがりとよのうかくすて天子乃橫す而りみよとてけて天へ
横よしうひのうへ横よあやとまれ生て月日と経るに清ハ



相うちわ別きてその娘子といふ事とぞあらぬ。然
もうちうひのひのむりするも娘の嫁れ業よもよこ外縁の
お産病に附もからむらうらうすとじてこれらをの子は生
えど見てもまだ娘一歳老の娘と嫁りんといふもあ
じまくよりうき因を乃りて而テ内中と詔せびして
ちあらみすまひく人の娘とく甚といつくもあ
がちべきんやうて乃て懲人慈幼とくとくの養育ひら
え産ふなれむ事より生くかう誕すナ男子と娘むると
も一婦人と云々。さて十嶋と名うるとも一小兒と云
ひやもあるまく小兒乃療治ハ大人よりもじつりき
業よ家主くる生りりいもんやせ乃へ醫の道理セ

らね、娘子と教育をあ葉よ多く身毛あれ、往々
いかがりありればじき半分を益てゐる。内に娘子
とちげく教育へてようとき人とあとなりよ本と種
と見よ分すろあと極くその本とよあすかまざら付と
よく塗ひ水をきぬる。馬櫛など乃よひがきぬるみ
くその葉とぬぬぬうにひと付くニニスす。でもうど
てぬればまほひの抵り。ともと木をわきば合抱りの
木と称る。すれ時より二三人ほぐれぬとづくそくく
がく時ハ合抱やどのあくねる勢ありとくわ軽やく枝や
せく併用するがざく。一筋の石子がねも一すみ付と
く枝あるがざく。一筋の石子がねも一すみ付と

よく廻らひゆくが年れまき様とあハナセア乃
人をもえん時とすくそだくはく百年乃壽とキム
外半とあハジマリ

二 延生乃記

○父母の合へて生れあ精子室より一月ハ殊毒母ヒ
と母子を形まで一圓水乃毒は生る所もあれお實乃
初生じすばはの内から水りるがまくニ月ハ桃花
のまくとくすうくとも新とあハジマリ胎毒胞
衣よりできうちめ湖より其うち放新。一く父の胞
衣と頭よりでくあれあら程いわと極るよその草と
生れ時ハ桃より穿甲とひできくニ葉生出るなり

穿甲とハ穢つわぬと比殺とつゝのあくとく穿甲生れ下
きハ袍夜ハ吉テノ母ノ胎内よ拂里す付一付の角による
やうする事多きの時脐帶と断く程ハ種つむけ内穿甲の
あく人の胞衣も脐帶も剪られぬとらるては胞夜ハ
文毎乃一照乃精珠。胞衣もあときとして附り一圓相
り紙とウシ夜うつまく家よされと櫻花夜と名付。と
りくうのうくらとあるトト金縫は胎内乃便れど
ちと載に一月ハ珠鷺乃吉ト二月ハ桃花乃吉ト三
月アラカ男女のうちニ月よそのうち金くを
うるカ月又五度生トト六月よ六月又七月モ開
竅風ノ開竅と開竅九竅の事也開竅と云ひ散ら
竅風ノ開竅と開竅九竅の事也開竅と云ひ散ら

令く九箇より八月子其魂ありか月よりハニ度を身と轉
びりて十月より氣とうけと云てうすてに十月より故
みつる時ハ女子受れ意とがよとくす害とおも
きうちをとりとめくまきゆるうるを身と分婉に付
こよ分娩とハ和訓さねど分生とよみく本實に應し
て肉と核とこれとあくがく又ハ筋乃熟一くの
づく帯れあるあく母乃胎内と名られくまれ下
より

○児子母の胎内と身とすもと時季にはのちの様毒と
くじ様毒とハ胎内とけられん惡消とひ児子の胎内
よきとがい日本よりじぶろけられんわ咽よきハ胎内

うちよかくれ湯よりおろ病と移りたりまこと下りとおも
転りる絹を指すよきくは中よりじむろけ、むろの
けとぬひあへしかばよとく母の胎毒の病す」と
保嬰撮要とよ書よアスリ

○玉隱君の説より女子生まれて身を身とせんと
より耳草ろけよ絹といひ、指とけみく舌はれ
事されるる懲けと拭ひあへ胎毒の病と云せぬとい
て身法と身とハ女子生まれずより耳草とせんと
耳ちやど布れ葉袋よくまくり女子生るところも
は葉袋と熱湯よじあへ汁と牛乳と上より下れば
くに本とぬづてしかせあくする半身日本小

てハナリいよりは少りほどまで産婦よりも毒氣を一そく
四子ハ牧宿めわねよすとうじゆよおまへセテ、乳より多く
ひあらうに常々に汗の様なる惡けと胸より汗を出る
よゑくハ胎毒の病とよゐべきれ。益事よもろとも
中花乃あとく穴子まれてよもよみれに中と城窓
用ひよ甚益る。一と日本ノ胎毒よなう一老全
わらひ産婦一ある故よりをもろくせらるよおーいろを経へ
心あらん人いすが志とは年々くせらるよおーいろを経へ
○博愛鍼とふ事よ多子母ノ胎内よある財へ母とその
夫と向くしきの手段とどもく眼と耳さきにと
ひじくればやへ、いふを胎内の様れる惡けと飲す

あらんやとアラトアリ、汗よらわびきりあらんや
すぞよを吸へとくろすと先子家とヨウラウする時よ
いわしてハアやにとモレクノ理ありませうと嘆す
ハカルミの縁毒とくえをくさうりよあらうとよ早
と械すよアラヒ禪れむる多良ト様毒と通ぢうとされば
だ乳とつあらうとする大變ト様毒と通ぢうとされば
胎内ノ縫毒とくせらうとなん人乃波疑ハラシカベし
（三）四子生まく即付よ用ひ葉紳ひ筋

の穴子生むるとそれく薑連の法と用ひ薑連三分
取事二分量ぬほと或ハ乳頭ア狀は無くよあらう
熱湯よひるしきと用ひバソの縫毒と吐せり

サヘキトセザレバカニアシテ毒氣ト胸脇ノ間ニモ
ガリ月日を経るニシテジヒシル所の病とけり或ハ寒氣
瘡瘍トシテムクハ御面ニ瘡出本ニ寒鬱トケリ
ムキト脂毒トシテ集驗方トシテ書ニ載スリ
ウニシテ取ニ瘡トシテ胃と戴キシテ方底ニ有リ
トクセトツナリ

○日本乃國ニキニテ生キテラシニシテ蜜藥と云
法と用ナガリ候ヨリナリトクシテ法款アリ根ガモ
クチナラニキ耳サシナカドリトヘキ或ハ蜂蜜ガモシテ
トクシテ縮ヨテニ惑ハ亂死ノ状ビトキヤラヘ等
ナニ中ニヨシキヘリリはリ中花代書ヨリシテシテ

シモニシテヨリナリトシテ驗ニト都鄙ニモニシテ防半
可レヅミニ代ヨリは初テルニヤ蜜薑獨リニシテ款モル根
味若レニキニ試用シニ中腰ガ内けがれニ毒氣と喫
ミ半中花代ノ彼ノアリ薑連ノ法トシテシテ之の驗スル
カニヨキシテシテノ法ヨリ其草ハ生ニ用シシテアリト
ゲヌリズ諸々と倭俗也ムカキトシメノ者ムリア
ヤリシカニ朗済集ニ敷冬搗後暮去風レシテ清眞云
乃待ナリアヤリシテアリリトシテ本草ニ考ミ
座處ナシトシテ其圖もシ敵也私生食ミル所の露の
事ナリ

○本草ニ生レテマニケル法ヨリ前後乃法殊密乃法ニミ
キナリ

いひく中元の日よりのを経れと 本邦よりへ其益が
一歳ぐ薦連の法と密薦とと用てよろ一其并本邦
此小兒醫術より薦方秘方歟立薦湯にて初事す用る
薦方ありあくハ薦香本も下者沉者など入る薦割
生て癪をきかせよ薦方一用す可。有主事りよ薦
速ノ法又ハ密薦とと用くければ物を吐出せば速う
くしてはハ草草がえり用くよ。

(四)児子取擧様の従

○児子生れ下つ時其帝聲と待ぞと草草のひた
一けよ翁とほゞく摘とつてゆく子ノロ中とぬくひヌハ密
薦薦連の法などと用ひ收斂す命じくまの臍薦

數々、慶陽とすとく取擧の事あき 李邦乃傳醫
里慶陽をりは而後障ふとら一或ハ屏ばと門よつし
スのゆめ聲よちひく治せよと
○細きる付へゑく母よけと付く児子をよむよび
ひ取擧る事ぬとされば多の月ハ定氣よむりこれ生ニテ
ハ死するに即ち半ふ一け時半より臍薦と断べ
ぞすこやに繫とあぬとあくとめ児子とくとく寝よ
抱き胞衣とゆくわくめあきるる張燭とさくとく臍
薦之上と達求一と燒ゆ一とせねばとくされハ暖ゆ
まゆ子の股のうよ通じてあぐくせらよえふ難
坐ゆる事も緩ゆる事といひりと保嬰撮要より之

ちりは張楊とやさか紙縷と大きよひねつゝからうの裡
しよく胡麻を油よりひる一紙楊をして用(きく)赤水玄
珠ろ後よハ紙楊るく薦(けん)切(き)てうそをす(せき)くはす(せき)
醤と熱くして肺(はい)帯(たい)燒(やき)因(いん)と(いん)見(み)極(きわ)めと
見(み)り改善(びんかん)常に(ひんじに)生(なま)くとらうとく驗(うなが)と(うなが)う事(こと)

五 肺(はい)帶(たい)と断(だん)乃(の)法(ほう)

○肺(はい)帶(たい)と断(だん)乃(の)法(ほう)作(つく)と用(もち)一鐵(てつ)乃(の)刃(のこ)と用(もち)クビ
轉(まわ)る絹(きぬ)を肺(はい)帶(たい)と(く)そ或(いそ)ハ單(ひも)の繩(いと)よ(ま)たく歯(は)
て歯(は)出(だ)へ一長(なが)め(あしなが)事(こと)すれ短(たん)く(く)そく(く)生(なま)す(せき)
歎(たん)掌(てのひ)裏(うしろ)長(なが)め(あしなが)るを(を)断(だん)ベ一長(なが)め(あしなが)れ(れ)外(ほか)

風(かぜ)と(かぜ)痘(うぶ)と(うぶ)短(たん)ずれバ内(うち)齒(は)府(ふ)と(と)破(は)る肺(はい)帶(たい)嘴(くち)
齶(くち)と(くち)手(て)あ(あ)すくられあ(あ)すく速(はや)に拂(ほ)ふべ一あ(あ)ざ
れ(れ)腰(こし)よ(よ)く病(病)と(と)う(う)と(と)日(ひ)隱(ひ)君(くみち)の從(つむ)ぎ(く)ら
○本邦(ほんぽう)ノ風(かぜ)と(と)收(う)波(は)す(す)げ(げ)漏(ろう)せ(せ)ら(ら)る前(まへ)よ(よ)まね(まね)す(す)
ま(ま)す(す)よ(よ)く(く)又(また)已(い)う季(季)捐(けん)る長(なが)め(あしなが)く(く)肺(はい)帶(たい)と
出(だ)す(す)ま(ま)智(ち)差(さ)れ(れ)て(て)よ(よ)肺(はい)帶(たい)と(く)断(だん)乃(の)法(ほう)右(う)より(よ)う(よ)う(よ)
す(す)法(ほう)と(と)之(そ)と(と)切(き)て(て)紙(紙)縷(る)と(と)き(き)び(び)く(く)繩(いと)と(と)肺(はい)帶(たい)
と(と)切(き)て(て)一(一)紙(紙)楊(よう)と(と)断(だん)乃(の)法(ほう)と(と)轉(まわ)る絹(きぬ)と(と)肺(はい)帶(たい)
ね(ね)る(る)紙(紙)と(と)深(ふか)く(く)深(ふか)く(く)聲(こゑ)を(を)元(もと)と(と)お(お)き(き)び(び)
く(く)ま(ま)く(く)聲(こゑ)を(を)う(う)と(と)し(し)か(か)ば(ば)く(く)せ(せ)ざ(ざ)れ(れ)ハ水(みず)湯(ゆ)



五字泰行の子法や、あらゆる脚帶と断ちられ
陰陽帶は、断固よりあま温みをもつて、脚の脚瘡といふ
而とまでもと戒め、きまう歎せん邦の臓の至
く脚帶と衝くは漏らんとゆりかあよひまくらんて
すばく産湯と身に附く害れ。

○產湯胞衣やふあ事感ハ、す日或ハ、一日と往く等下
る事わざと大抵、産湯の時、あ後よりやうとおとせ
二時ともやと半分まで生むる御り、す時半ば、收斂等
事と並び、自らひぬか一キよりするは時半ば、收斂等
命がくよく脚帶とましく取擧へ、室署れ四
う所うち、生む、一もとの事と見、脚帶とまく出

をそぞれ、生子の氣母の脚より、胞衣も下り
ゆるものなり。

○脚帶とましく共まくや、足後、二二壯をとされ
てのゆすらじきあら、こすくゆりりとしりを
る人、あると都の人の弱くせぬ事、富と縫縫う人、東の
人をさすが半とすら、膝盖を絞すは、一の便すり時、あ
めうけ法とたれ者とくらはゆく、ひまゆみをあらね
のゆすりやくじ法とくらべて、生子をとせじくし
きじかく、とくよはけ法とすらくり、(や)事と
○收斂脚帶とまく時、やくふるを安と付、漏くを
一枚、第の付せり、ひそく利慾也。○胞衣と監

く藥匙より賣爭りありと依説より胞衣と取て方々手す、そ
ぞちかたくもぞもひらひの軋官婢へとまき
ゆるへし

○胞衣と御手洗法の胞衣と水をあらひ松の油を用
ぐに毛を落毛松子と落毛キモトモナヨとらめ袁方
角をえくひんの端板の土津みぬく御じべきらる玉枝
金輪より胞衣と御手洗、新さ総の内より御くらまを取
そはとつともモト一と傳せをゆわひ二自づ後育亨方
とえひ陽子拘ひくち不乃他より御ひ事アニスヨモ
トミシテリ拾芥子より胞衣と御る吉日酉月、亥子二月、
巳寅、五月、己午四月、卯酉月、亥酉月、寅卯月

八禪朮八月八未申、酉月八己亥十月八寅申、十二月八午未
十二月八寅酉是木の日より納じし又名日より酉二月八
申酉三四月八午戌立六月八申子七八月八寅戌九十月八
子辰十一月八寅午五八甲子夏八丙午秋八庚午冬
亥之次又甲辰乙巳丙午丁未戌申はお日御じいび
のせうち

六 廉匂乃院廿四常よ漏する院

○生母子と汝ノ湯と乳便を匂う其水ハ教済水と
井もわらじにすゆく水、ろ水又ハ露露水と云ふも東へ流
る川水と露く湯よ拂へ、敷かばぬる即ばよきがよ
ひあわせくゆすと汝すべし

○主徵君の後子まれ子と薑湯より衛脣汁かどり
れぞく湯をべし薑脣と生むる事わざと云々も猪脣
汁とぬたぬものあるあり私家鑑の字をあやまつて
内のあととくぬる者ゐるものちひ本草より野猪と
のせうり猪とぞうりハメハサキをすく子の後子、生
すとあくふよ薑湯と角へ一ふとくい桑槐榆桃
柳とつる草と云々_{皆益}猪脣すは草木邦から
きすくへとうとよい角くせ子をすくらを猪脣若を
見れぬ後をまわすりとあん毛を中花にてする事と
之が子の若毛とも考をすりする事もあわるを知る
坐勢胎内とぞいはまく自らも風けめぐる刃に附れ

○薑湯の素子すくはのりと高と生びる者ゑ
薑湯と角へ一ふとくい薑湯と角事とくれ十餘
日とゆくは薑湯を洗ひ方をよ
○生く子の深す初生てまれる兒子と薑子事子三百子
詔あら事ハ儀禮の定つてゐる所生子羸弱すして
病あし六月教みやつて六十日とすらて汲汲モトシと
之を離れ牛乳を生て、牛乳を下へ心身三百日とさまそ
ひ事實すもろ後れとぞくろ 本邦近來の外法
全事と下へとおまく取舉く派毛なり給奉ね考
あゆ初生の小兒沐浴の吉日と載毛毛が廻ひ未病
牛乳而或ハ寢中、余ほり日とえくは薑湯毛と汲く用

と見て、うらあきよよりくされば、本邦もむまに生れ
やるとそれは、治らるどすもの、至らず、治らるを失ふ
れる時のうちしきは、うござるがよき。されど財の財
よりく生れりもとそのまゝ取扱ふは、ひるが、おに
うりそ向ふ感はす。す、虚弱は、くまれわらと、寝てろ
病ある數の少子ハ、多く、おひひ久立、寒氣も
とやらぬ、念てほ、活まづきあり。

○骨傷すら、既に初く生毛する児子とは、すよ、うすび
えの聲と、微べしと、す、聲ハ、め、義乃神の、而ど、あ、而
穴を覆ふべしと、もとと付う、聲は、その理と、活ま
ぐみりよあれ、脛がよす児子と、のせくわく、春

重と、背、す、あ、下、多、一、きもの、湯股と、じらす
盥へ、じらすて、穴す、脚とも、背と押も、教あつて
取て、あ、さす、手、かまは、手、脚、く、活、の、と、あ、處
生、活、す、時、よ、も、と、付、べき、事、す、前、荷、仁、家、皇、帝、と、ア
キラ、資、主、の、罪、ある、者と、杖、も、は、背と、う、門、す、す
れく、命、も、よ、眾、人とも、腰、神と、廢、め、事、と、い、ま、す
を、お、か、よ、そ、逃、れ、ハ、和、サ、て、生、れ、る、お、兒、子、へ、半、と、骨、も
の、も、も、ゆ、屬、ぬ、も、の、や、れ、ハ、處、は、即、く、倒、て、球、子、背、
ち、す、く、ば、す、と、半、を、す、
初、生、の、兒、子、と、ほ、す、よ、は、活、す、よ、く、取、廻、し、う、よ
き、う、う、よ、く、活、す、よ、く、取、廻、し、う、よ

零^{れい}一ヶ月をきらり序^{じゆ}記も一ヶ月^{一月}二十日^{二十日}と一月^{一月}を完^{わん}成^{せい}す
 本邦^{ほんぽう}内^{うち}延^{のび}二日^{二日}二月^{二月}一旬^{一旬}ある^あい^い^は毎日^{まいにち}
 延^{のび}ハ少^{すくな}ま先^{さき}起^{おき}これ皮^ひ膚^ふ脣^{しゆ}くらぐく風^{かぜ}と引^ひき
 十日^{十日}とわ^はな^は先^{さき}子^この熱^熱のほ^ほこものせ^せ癢^{かゆ}
 痒^{かゆ}と生^なれ^は氣^き三百^{三百}目めよあ^あひ^ひよ^よ都^{とつ}も常^{じょう}
 よ活^かす時^{とき}股^は付^{つけ}根^ね又^{また}腰^{こし}下^さざと^と乞^くをへて坐^す
 き^き

○澄^{すく}治^じ準^{じゅん}確^{かつ}は^は足^{あし}と^と足^{あし}及^ひ朱^{しゆ}粉^{はん}と^と用^{よう}ひ裏^{いり}
 紅^{こう}城^{じゆう}粉^{はん}と^と用^{よう}ひ^ひと^とと^とと^とと^とと^とと^とと^とと^とと^と
 肌^はと^とと^とと^とと^とと^とと^とと^とと^とと^とと^とと^とと^とと^とと^とと^とと^と
 あ^あま松^{まつ}脂^{しじ}或^も葛^{くず}粉^{はん}又^{また}天^{あま}紀^き粉^{はん}と^とと^とと^とと^とと^とと^とと^とと^と
 と^と

一ヶ月^{一ヶ月}を^をすれ^れか夏^{なつ}の瘡^{うど}疖^{やく}を^を生^なじ^じづ^づれ^れて^て有^る病^病
 と^と通^{つう}の細^{ほそ}所^{しょ}と^とくめ^{くめ}で^でし^し先^{さき}子^こには^は膚^ふの理^りには^は重^こ
 に^にや^うう^うと^とき^きバ^バ未^{うす}未^{うす}未^{うす}未^{うす}未^{うす}未^{うす}未^{うす}未^{うす}未^{うす}未^{うす}
 ち^ちあ^あり^りう^うあ^あが^がも^もく^く瘡^{うど}と^とも^もも^もも^もも^もも^もも^もも^も
 ら^らく^く腰^{こし}下^さ股^は付^{つけ}と^と脚^{あし}の下^さま^まき^{きて}げ^げと^と
 あ^あく^く上^あの^の下^しの^の内^{うち}から^か腰^{こし}と^と天^{あま}紀^き粉^{はん}松^{まつ}脂^{しじ}
 粉^{はん}入^い新^{しん}と^とう^うう^う或^もい^い研^{ひき}茶^ぢと^とう^うう^うも^もよ^よく^く
 七^セ乳^{ちち}付^{つけ}付^{つけ}乳^{ちち}母^のと^とれ^れく^くい^い摩^まと^とあ^あ衣^え
 ○生^な生^な取^と舉^げて^て右^うき^きが^がひ^ひみ^みた^た綿^{めん}と^と襯^{てん}
 と^とすと^とま^まと^とし^し事^{こと}變^かふ^ふ腰^{こし}わ^わう^うう^うう^うう^うう^う
 う^う

人乃懷子抱之而一旗乃中夕も又ハ職事より
象人（よのひと）よりも子（こ）とるて産く子孫盤局（はんぐく）の事半
乳のゆゑとえびも懷中（いだん）に抱き先く乳とのゆゑ
をせしよと乳付（なづけ）りてつうと是本邦の風

俗名里

○同本紀と據りて他娘婦と用く乳とい皇子と養
育（いく）すちを世帯す乳母（うぶめ）とぞりく乳と妻（め）と娘（むすめ）と
女（め）と（め）（母益）据りて他娘婦とぞりく乳と妻（め）と娘（むすめ）と
皇子すとへ移す舊不念尊の臣事すとぞりく乳神（うじん）の由
豊玉姫（とよたまひめ）の產せ終すとぞりく時豊玉姫（とよたまひめ）は嫁（よめ）此娘
嫁（よめ）の君す繋りて皇子す乳とぞりく終す母益す

乳母（うぶめ）とぞりく半弓（はんきゅう）國（くに）をまうひとく安らぎと一
矢（や）や御れハをき神代も乳付（なづけ）りと周（まわ）りてす
くよりく國（くに）の音（おと）き風（かぜ）りすや

東邊す武衛（ぶえ）

源頼朝の歿生れ初に乳付の君とぞりく

摩（ま）とと毎（まい）とぞりく乳付の君とぞりく
くぞりく都（みやこ）をひそひそて東（とう）又ハ篠紫（しのざい）の方（ほう）とく
せうつま頼朝（らいしやう）の唐（から）とく始（はじ）りすや唐（から）ばくの
と判（はん）せれはあゆみと母（め）とぞりくて育（いく）らとく唐（から）とく
ふや又小兒（こじや）の食（く）とお郡（ぐん）たすまとく乳（う）ハ小兒（こじや）
食（く）ればすまとく乳（う）べし

⑧生れ子す乳と餌（く）しむ乃經

○初生の小兒は乳と吸うる事まずてやくよりて時
びへりとくほ乳付ひへれ乳と飲むじべーもまよま
蜜薑又は黃蓮取草すれけと吸むとくければ
わとせをくよー生もみる後よ初生の小兒は乳
と飲むとあされハ胎毒とらじと實どくある
病とりりとくこす

○小全方よ初生の小兒は乳とつよく飲むしろ半ら
れす自みハ一日どうりとくは飲むと一早され
いかゆーとくそくら蜜薑搗びるよ凡母のと産する
是玉座の自歛りれば母の乳汁出る時とまじく飲
ひの事自然の氣度りるべー本邦毛もその國の

○傳よりく母の乳生すからハ蜜薑などと吸る
者他人の乳と能きえらうあゆま母の乳生す者
育ちんとねりぐるまきと母の乳房とくと仰げく
ニ言ふぐりうますよ吸むてま子のみを吸むじき
二うると乃びくく感ひすらふ十時どうりあくまを
ぬる乳出るをあつまされおりてよ母の乳と飲むく
育づべきなり音涼の致難無列處の時ゆ陰なよさ
すよひひりーは密被せらう深いもに置之而かく
終ふる乳付乃女乳母やどくゆをがくわきれだをと
ざらく角形へながるたるキモアをばらるる乳
育ぐて母の乳とくまとせらるべーされば假

ちく御んびとやに附がては家畜財をも人へり去
産母ありて乳汁も涸れりて母の乳と飲むと之
を半日程の自給をせしゆる事よりして之をも
教ふもだよと教へくは私母とすきものと教へぐ
ふと手は育めざりしとちて一ちだ産母とへ衆多の事より
とほせり日本生ては高野家教を立りておまく乳
母の事と云ふすらうちとへ母の乳とへ育てやうと
よねど中元もすくへ母の乳とへ育てやうと
ちくと付りへり。産とゆく母の乳とへ
育てやうとせり。や繩すくへ母とへ母とへ母とへ
りと授じ乳母とへ母とへ母とへ抱かへ母とへ

生てぬをみて母の乳とへと飲むびへれどく
生れへ三年の間をやよみの次は子と教へてく母の
病院にてトドード母の乳を産婦をしてやへ乳を
御へる者乳母と云ひ其乳と飲むとへあく
母の乳と断つては血脈はりんすとへ飛乳。懷妊と
やそ多くをとうがひの養へとへけむ。重ねて
坐ひ寝てくあるとへいそや散策とへ駆け出せ
人へ散らば母の乳と飲むとへおまく教育とへ事つて
御せとへろんじへ懐胎ろ中をへゆる。きみ
意よりの時えよよりも血も脱へぬへ難い

婦人ハ血氣ヲモ子不思するトトロく乳汁モ出ガ一
ケ松らぬ人モ乳乃効るとすらく飲ありとせひを
トトク飲乳モアリサヘれども人へ乳母と稱
ひシ、おほいし穴子と教育シテモかま一聲あよゆる
べし。

九 乳母と探求の統

○陰毛前歯後より乳母と探求中ひらくろ切からとを
乳と飲く歴年一例く深事タリされば乳母も生贊
心根よりの旨よく御ふもの多きに至る血氣の解
多キニヤされと水と接よキトモといつて沫よみと
足りや接すれり慕すりくきハ接種也變るる事

不肥脛うれば接種もよく盛長する事あらまと云ひ
し乳母と接すれり事○弟一病者にくる色青白く皮膚
色形體も憔悴する女○弟二痴臭ある女○弟三痴臭
瘡瘻ある女○弟四身中瘡瘻あり女 瘡瘻といひ是ん
ぞの○弟五楊梅瘻ある女○弟六瘡瘻あり女 がごこせきをひ
瘻あり女○弟八癪瘻あり病ある女○弟九畜聲あり畜声
ナニ十二鬼缺あり女○弟十三齶鼻あり女○弟十四吃音女○弟
又痘痕ある女其外五體不具の女 俗よよび六孔女是れ
女と乳母と守候うると諸の醫共よ哉一
○司馬温公の後より乳母とえども事つらく一くすべれ

乳母より、それぞ家の法と並べてのこよあひておふす
をすとくりすすむる養らとくき乳母よゆるうつう
じへと云へる。日本ふくも乳母と稱す半身うち
そふせばりく乳母せまく其元脚よく乳けも御ゆる
女と称んく乳母とすまく其乳母はくくハ殿家より
者と称んく乳母とすまく其乳母はくくハ殿家より
○且肯宴あはる乳母ハ氣血をよ醫んすく乳母

ゆすと生贋よき者とくへー乳母ハ都よ飲食
と供え也無とすすゑくび窮牛とリすべれ乳母の
と供え乳汁と供えられハ一切ナ半身とちよきかつと
きよき益乎よに 日本よても富貴の家よハ乳母と
くぶ半身のとく其つてーとを法すとくらうとくく
と育育よ半身を主とし獨坐を主内取ハ主程よくき
すくみーいんもれハ乳母ハ今婢婢りと有りトニ
己が衆よ在く他法が様としすりもく夜敷も解く
ま生入食わる麻葉どろと寝あそびく往つて
儀よ達つとき夜敷ハ絹繡よ寫て厚く裏の表よ
うちテ乳汁熟と等タツシはく乳子に寄とらぬ食

外より育きてわ奥乳うどんとす先代更衣をすとく
お乳の食事よりかうと乳母とく飽満のよに
せざれは乳を出るすにてとを立がちと食りむ
乳母はつゆよ含めぬまわきはほひく含み
胃も充塞多く猥滿へあとりり或ひやき病より死
りうよ乳の育て入の家によりく乳母の歿へと跡
なり儀化法と教へ平生乳母の死を知らむが
はと乳母と葉の扇へとあきゆじゆく乳母
の死する時は扇へとくとも妻を駆ぬ業とけりり
より乳母の死難へ帶び多く乳解色せんとのつ
乳もぬぬの多一又を家よりけりり



え乳母に生まほつて多くは乳を出ぬものゝ事とが、乳母に
あらりよそより乳をすらがすれとゆうせをわがら後より
がまく船取る方には乳母へとづぶとくおもてるるく寄
居ゆくを一きものハ隣家うや者部在とけむるに観
放送にく家の法と乳へゆるともゆのうすうあり
のうて不善な様あるとぞ察はふ事缺くうのうゆる
乳母の事と眞頗頗へく多くハ乳母の性は難く家ま
者さかうりあす乳母の徳と譽へまゆや
○乳汁あ集す乳汁乃色ハ白一白きはまれを重ひ肺の影
内する而肺ハ人乃絃また乳を乳汁い生育のまろ根
子たれ乳母とまき胸の娘がれハ青色白一とてくらむ

きハ乳汁乃色ハ白きと歎がうる乳母とえふ時を乳
と青うせと色とアラベーラ色苗にてく濁る事あれ
うる必用ゆされ候くゆるときすりうる
○かま方乃役よ乳母健りる者ハ乳ノ生あり事くも
乳糖くちきと擦ハ必能をうる事ありとあれとあくも
ちとるししく後定子よ飲あひべしゆよ乳母の事
乳と終りしく後定子よ飲あひべしゆよ乳母の事
と宿熟乳と名傳く小児よ毒とあらとくこと
○乳母の餌食すりうち乳汁とがだ歎すき乳と鶴を
きらふす感有りうるやう紙よだようち
○乳母熟と含すれバ乳汁熟て家と餌られハ乳汁家

至多の何物カタ一へ乳と飲ハ當トキてからを付
定シテる乳と飲ハ雲クモ物モノと生リて前病リツビと爲スルこ
○乳母怒ハラハラりく乳と飲スルれ小兒コノヒよリて癰ミツマ
癰ミツマの病クモとす

○乳母酒ヨウよリ醉ソラく乳とのぬらしきハタチとて後痛ハタチ
○腰堅ハタケンの乳と飲スルれ小兒コノヒ瘦モモくと腰ハタケと股ハタケとまよ
而ハシメテ癰ミツマじ名ナガメはも懸ハシメテ病クモとよからず後ハタチととづきより
あらふし

○乳母ヨウよリわらく乳と飲スルはたハタチとて後痛ハタチ
味ミツマ遂シテりじ

○乳母ヨウよリあらく乳と飲スルはたハタチとて後痛ハタチ

○乳母ヨウよリのまく乳とあまゆきハヤシタマづこ病
の生リと生リ一ハシメテ奥半カハとなり

○乳母ヨウ一ハシメテするやう乳と飲スルと之ハシメテの病クモと
○乳母溫ヨウ瑟シテんジン切カツと飲スルて乳と飲スルしれと愈ハシメテ
胸毛カヒの病クモとなりれわ信ハシメテよあめもしハシメテはり

○乳母酸ヨウ鹹シテ食スル或ハシメテなる肉ハシメテの病クモと飲スルて乳と
なれハシメテ渴ハシメテの病クモとすらうこ

○乳母ヨウよリ碎ハシメテ肉ハシメテ中ハシメテくハシメテ一ハシメテ破ハシメテくぬ乳と飲スルし
れハシメテかハシメテとハシメテ乳聲ハシメテと知ハシメテひつし

○乳母ヨウ咳ハシメテ嗽ハシメテある時ハシメテ乳とのさうハシメテせハシメテハ欠ハシメテとハシメテ乳風ハシメテ
嗽ハシメテの病クモとすらハシメテ乳母藥ハシメテのとハシメテくるハシメテ愈ハシメテし

○乳母或は母と喜んで笑ひて乳をうすり
しれば涎とまく嘔吐となりて

○乳母右手をおとすと乳と節しきりと
被拂つて脚弱く行事遅る

右ハ乳母の身につけても手半分もまげますとや
左ハ乳母の身につけても手半分もまげますとや

左ハ乳母の身につけても手半分もまげますとや

○小兒あひる聲ひく即付よ乳とおえは難く癪病の
声をまたあひる哭く乳とおとめび吐鳴ともれ大よ細く
乳との身に股痛とくたたよ飽く乳とのめがふとや
一キ半とりひだす聲く乳との身に吐鳴後痛とな
る嘔吐いまと空げく即付よ乳との身に穴を

く嚙傷とまだあらり右ハ中筋の身の上のつし
兩の脛骨と足の筋骨と醫院切科準確によくうち
○丈夫方よ乳母児子と抱く時ときハ己^{おの}の臂^へを抱^いて
一^いつ、児の頭と乳の頭とたいてよく乳とのまゝ
て寝すだりし小兒眠未^ま乳母も眠未^まとするへ
らうのれとうづひがくし眠時小兒をねねてひを
飲うる乳母もあくへゑくく咽吐のあとまじとま
より咽吐と小兒のりふれとあんじよく若蓋^{わせ}あ
よおも小兒も眠未^ま呼吸とくらゆすとあくへ
乳房よて児の口鼻と耳の息とそえて乳ふ
乳房よて児の口鼻と耳の息とそえて乳ふ

あるを乳母よりうそひよ寝て死すと已が身も
あき難き類の事多め一まじい殺よつされとも
かくして死ゆる事多しとす。まじに死きま
被ふると付きすらま

(十)

乳母の病よりくゆる病と呼ぶる經けり
乳汁生が致時用る薬剤の經
○生とされは乳母ハ常に飲食と寝して乳母の
飲食するから乳汁とわら奉り和辣や味の薬物製^{ハラタマカクハラタマカク}ておき。肉食油氣酒の數といじられと化せば薬
乃肺胃は熱生じて乳と飲ひゆすすく病とほ
取れて。瘡と生ずるやうとこそなり和倍されと教

とよく母と乳母は熱うばいづきの病アモモア
上での薬門と被ふて癒治して乳母は飲ひる薬
利よハ其をとづへく用く。もろひあり。すりすれ甘草
甘草としまへ肺胃の氣塞つゝ乳汁。この妨あくさ
左耳より。本邦よハ傳ひやすら。本草と考ふ。甘
草の乳汁よ妨あくさと。草と載は。生むを多く。考
えくに。ならぬて。さすがに
の乳母が乳と。よ乳牛す。すく。御く。うらへり。辛
あく乳母う。まじに。すと。り。も。あ。り。ね。す。と。と
乳と。え。が。せ。く。そ。く。べ。し。乳。う。ま。く。と。く。牛。あ。う。せ。と
も。や。お。ま。き。と。す。の。薬門。が。乳。と。用。ぐ。し。和。倍。ハ。乳

母よ葉と服されざるより乳よ葉を下げ者と云ふ者
者ふしとよ乳よ葉の生す方よ葉と見事と呼ふや
ひわら附葉と服せざんにその病いよりて愈べき病愈
んはいよく乳母氣苦トシテ乳うぬう門とへりと乳信
の後よりくとくは乳人の氣れわづりあるとて物の用
そくあそきとへりくべトヨリふあれびとくすり化計と
のますれとおも食よとケドきゆ波つねく病と生
びうらんとらひづきゆるる

○乳汁牛乳附叶裡魚と味雪汁とて愈く創とれよ
く牛乳牛乳と和佐草にて牛乳牛乳と本草と、
裡矣。一錢桂細末。一錢酒と用とえとち裡と

牛乳と牛乳と乳癰ト一く用し酒とのまぬ乳
食のまう湯みて用ひ方がよきこと
○乳汁牛乳と露蜂房と玉露トシテウツモリ生え
る。牛乳用くすり。高僧房とハ澤のう本草指す。けち
増の氣の氣病トシテられ。とりくら本草と教はす
乳癰と乳瘍とすわづく乳汁と通じる。すみれと
りをつゆ用くを驗。一く用く始む
○乳母氣あふハ玉露散とよよ加減。一く用ひ方とよよ
加減玉露散。當歸。白芍藥。桔梗。川芎。白茯苓
天花粉。木通。穿山甲。右八味各半錢。一服と
もようよして都のとくよや下用ひし乳母の處

實定變と云ひて其の用は殊と申す。而して變を爲せ
ば必ずもうち居在するに由りて上と下の事は於てせまざ
べきも

土 小兒衣冠の統

○半金備ふ生を子男すが又乃よりき衣冠と用ひ女
よりべ母ろ古き衣冠と用ひわらわらくうらへ已
父すよ義べー或ハ年考すり人ばあらき衣冠とわ
るゆくく若セレヒキイアシクノ官長ツリヒ
利有る衣繫の難と用ひ草くれ衣と雪くさせく
變セラシキ事カれは脣と脛づるより瘡と生シ或
ハ瘡病の病と申すらうともさう
○小兒の衣類ハ絹の服と角くは札記すがるよ書

帛と毛をび又觸れ禍禍せびとアラウリ藝といはす
てアラウル毛を毛と目すとモテモテモテモテモテモテモテ
毛のアラウル禍の禍衣やうと角く和絹のアラウル禍半
禍毛うどけ敷方里禍と胸の下ごろのアサヤ腰肩の
毛すれ浴は帛いよ温かにて微氣と面づる小穴と毛
禍禍つものと毛のアラウル陽毛すれ毛の毛のアラウル
敷帛と毛を毛アラウル禍とつも毛のアラウル禍と
アラウル禍のアラウルとぬせぐろ敷方里布とアラウル禍と
用ひずかられる者へのまとうの共縫罠綿綿と角く
カウルとアラウル

○破蓋病の小兒の浴湯の時ハ勿論て父母も古ニ

衫と用へ一々の附とも有る綿とへて着し
和服あきと布子とりそ 日本は綿の種と裁へま
桓武天皇延暦十八年より豈處人を漂泊
三河よりよもぐり人綿實と號く號りて裁初しより
日本國よりすまきと類似國史而九十九寒より裁ち
中には事よや世故く綿實と裁ふ事と考じく後ハ布よ
りこへくもきよと本之御本体のひえ中にれもり候ハ本
室日本中華りて御綿と稱へて布よ繫
法へきて若る事やもぬらきどうをきと云すれどいよも本
瑞毛糸と布子とりし綿と云綿とりすや即ちくら
乃義あらうる本綿と云セアシラもよ／＼がく

き袖もす／＼づきもまわ縫りけりと著を一じ／＼こらす
或ハ冬月の生れ子或ハえを多縫あるかゆひあくハ言葉
すゆ／＼うき綿と角るもよ／＼お綿けれハ小ゆみ
くらく風とまざはれりとすぐ少見の縫被尾巻の
於ハ布にても本綿よりもう／＼扇あと云ひすすみさて
本綿の温よりすもあがであらうる綿被のれ腰巻
あらうとす半身もれれからまじ脛つよ廢とす／＼その
れつく本名廢とす／＼乳母もも廢とうす／＼廢す
ける本廢あらうものすり廢と付くことあるもつ
○小児の夜熱と寒と著は附にテ薄子とくらす
腰とぬ／＼く大と燃一温を／＼うて著せ替べと

子全福よとむらり

○玉露やくの夜子小火すまやしもひ難き附生も火よ
てゆづべつて難はくとく皮膚をあらそひうれと
火んをひあうがく小火の夜れどと人の膚よつけて寒
ときよそよしのゆの附生も夜を冷で寒がくいはるや
きの附冷ひる衣れどあきしる事うの難ふとはきよ
○あま風すかゆけのく寒嘯すあらわすじうき
ひ衣ろ中よけりとく寒嘯すあらわすじうき
スキテ日をうくもすくもすくもすくもすくもすくも
生ド或ハ蟻うらひけりを出の衣のうちよ入る時も
寒嘯すあらわすじうき

させくよきうり

○小火の夜日よ囁くと見うわ向よ歎めり
あ病すかうてしる事うれとうるよあちうたる夜
とあきよじとくとくの寒よわらう病と生むるこか
だくよかうと姑獲もとくもわるととくに
とくよもと脱くいせんとくの胸へあふあれを
はるい嬢姫のゆくをう事とえいとくあらる者化
いくじもとおけまの人はすとくとくおひく己が
子とくおひくわらる家よあよへく夜と囁くとくける
おわきよくわらる衣よ血とまくよほあくすら
とりくよくわらる衣よ血とまくよほあくすら

のやまひとまへる病をうらもとせばあきとや草庵
と名付くそぞうりあはせむとまめもじとあり

三 產夜の寝りて掘神の泥

○月夜のよのぞく坐して子とやまもれ、親族の陽氣或
是テキをとどけ方よりその根元にてく剥いた
根とうちへ毛根ね糸とともへ取へ取へて根と毛
てらりごとく根糸と毛づけく而前とくらきく遂
タ身を守る事無事ももの根糸を根茎わくおどりて
せじゆぬとくに生すよきせりゆせりゆれ延年能
く多くは五よふをそひへてもの以上よかびく去
せゆくよつよ延年能守りの云のもかくの藝つよ

一 舜とくは就る多難拂とまへしとくら
一 舜とくちよまれる月日よりとくはねりる月日

とりよ和宿りしもの能生目

○小笠原家傳れの書よ婦人傳姓一ヶ月もよ帶
ひられあまうれといひて亨とよまぬが長て八月も
あひられあまうれといひて亨とよまぬが長て八月も
多くいわゆるよともあはれとよまぬが長て八月も
しけ帶ハ延年よりは延く有よかようと付て
くひとあひざなびしゆく裏よもげまわとく
してつけてますよきよろぎりうれとをかみて

とくにありまち集よりとうとうとくわがを西と
かあらうとくもろとくもとけますい數のえ一きよ
とくうりあ後うめりてどつてくとくくとく
もといがへとう草とくものにやくさやくじくわくし
くうもさね草うどとくあ付か教く一あく一き
あく蟹とあとと付くもあつてくべこするうと漢鏡
みくまれよにがりる鏡とよゑとじてくらのまゆの
ひとうと付く御う鏡と中鏡の鏡よ萬もう少くよ
うたける衣鏡とよゑとじてくらのまゆとらむ

身の内情を見て生子は多幸の氣味は無と考へ

○日本ノ風俗アリカニヤア衣服男女もすと本意
便くハ腰下トとウハウスモセキトツミカアケト
レヒテ振子ドトシテ 着着ナリムニ皇子後金ノ下
も汚幼稚アリハ缺脇とく腰下ケル腰袍と云
セテマサハシタハ行幸中ハシケシトミハ原
トミシナカガリト御ヘ御リハホロモシヨウラムス
ハシケリテ者ニ腰下行トモモトニ属伊ミトリヨ

おけつまれ候るより又小児を自らかばく月の
とちどんをもあぐく同よさうして舞つよな
よあの脇とねいよて手撫とまくわじよおするや
腰にけ理とゆゑる人か死の衣紙ヨミカレハ風と
やうとく神と語くなは事と陽半と名付或ハ阿蘭
陀那肌毛とぞくひて解はる事一ひうれ熱すとてこちく
もとさげるびごゑの事と附りぬへる事ハうち神
ハ生の風流の事と云ふと附りぬへる事ハうち神と
もく年たはすぞうち神と云ふしるハうち神とも
りく坐すと云ふより小児撫け事よと神よきられ
く腰にうけて解はる事一ひうれ熱すとてこちく

